

まえがきより

近年日本の社会で十代の子どもたちが起こす衝撃的な事件。それと平行するかのように小学校で急速に広がった学級崩壊。蔓延し、ますます陰湿化するいじめ、増え続ける不登校、大人による「新しい幼児虐待」等子どもをめぐる環境は今や危機的状况にある。どこに打開の糸口を見つければよいのか。危機の中にも子どもたちのかすかな希望の声が聞こえてくるようではありません。そうした声を紡ぎ出して子どもたちの新しい可能性を切り開いていきたいと思えます。

I 章 危機の実像

学級崩壊とは

ここでは、今日の子どもの危機の典型的な現象である「学級崩壊」、「新しい荒れ」、「いじめ」、「虐待」の4つを取り上げ、実態を明らかにしています。

まず、「学級崩壊」ですが、尾木氏は下のように定義しています。

「小学校において、授業中立ち歩きや私語、自己中心的な行動をとる児童によって、一定期間学級全体の授業が成立しない現象。」

発生のプロセスとしては、**学級崩壊**を生む

①「引きがねっ子」の存在。 ②他の子どもの同調圧力の強さ。 ③崩壊期間の長さ（2、3週間）。

この3つの条件が同一空間の教室で見られたときに学級は崩壊すると言ってよいとしています。中でも②については以前なら引きがねっ子に同調する児童が少ないか、いなかったため学級崩壊になるなど考えられなかったといえます。

著者が全国で聞き取り調査や授業参観を積み重ねてきた、崩壊してしまった学級の子どもたちの特徴として、

①落とし物が異常なまでに多い。

②衝動的なパニック症状や小暴力を多発させる。

③何かあるとすぐ自暴自棄になったり、失敗やビリを極端に恐れたり、嫌なことですぐいじけてしまう。

以上の三つの現象を取り上げ注目しています。これらには学級崩壊の全国同時多発の鍵も潜んでいるとしています。

つまり、「1, 自他の認識力不足」、「2, セルフコントロール不全」、「3, 自己肯定心情の弱さ」、これらは成長途上の今日の子どもたちすべてが程度の差こそあれ抱えている問題であり、学級崩壊は決して一部の子どもたちだけの問題ではなく、現代に生きるすべての子どもたちの成長上の歪みや苦悩が投影された問題だということです。いくら担任が力のあるベテランの教師であっても学級崩壊は起こるし、90年代から全国的に、特に低学年で起こっている学級崩壊はこのためなのです。

新しい荒れ

次に「新しい荒れ」についてですが、普通に見える子や、あるいはむしろ成績優秀な生徒が周囲の予想もしない問題行動を引き起こす事件が相次いでいる傾向は、今、中学校を中心に、高校でも小学校でもはっきりした潮流となって勢いを増しています。では、この「新しい荒れ」は、非行を起こす子どもが外見からわかりやすく、ステップダウン方式で非行を悪化させ、暴力、攻撃の対象がはっきりしていた以前の「古い荒れ」と比較して何が違うのか。その特徴とは以下の通りです。

- ①「普通」に思われる子が荒れる。
- ②「いきなり」「突発的に」暴れる。
- ③凶悪化している。
- ④全国同時多発的に起きている。
- ⑤小学校で衝動的な暴力行為が多発している。

続いて、「深刻化するいじめ」の現状ですが、近年いじめの悪質化、大型化が自殺へ追い込む事態へと進んでいます。

いじめとは「同一の集団内の相互作用過程において、優位に立つ一方が意識的にあるいは集合的に他方に対して精神的・身体的苦痛を与えること」（森田洋司氏）という定義に著者も「簡潔にして充分」と表現しています。

本来の人間関係からいえば、あるべき友愛やいたわりや相互支持が逆転して、人間への「虐待」となるのがいじめの本質です。

つまり、学級の集団として拘束力が強ければ強いほど、教師が正常な人間関係の構築に成功しない限りいじめは発生するという理屈です。

総務庁調査の結果から明らかになる今日的いじめの問題点とは、

- ①いじめの事実を認知している教師、保護者がきわめて低いこと。
- ②いじめの加害体験者が被害体験者とほぼ同率の30パーセント余りを占めているということ。
- ③いじめられている者が誰にも相談できないこと。
- ④いじめ克服に必要な事はクラスの友の動向であるということ。

以上の4つだそうです。

著者は「いじめは悪いこと、だから許されない」という道徳的価値観を押しつけるだけの指導でいじめはなくなると言い切っています。なぜならいじめは、「面白い」「ストレス解消」「ゲーム感覚」だからです。また、いじめられている子にとっては目のいじめが一日も早くなくなることが先決です。

今の荒れの解決方法は 加害者を救済すること「いじめ行為という人間虐待の非人間的な世界からの救済」がいじめ克服の近道であるという、著者の考えに大きくうなずけます。

子どもへの虐待

最後に「子どもへの虐待」ですが、新聞やテレビニュースを見ていると、親からの虐待で子どもの生命が脅かされる事件が後を絶ちません。子どもの大人や社会に対する不信感や不満が増大する一方です。しつけという名の子どもへの虐待。しかし、その裏には、我が子を「しっかり育てなければ」という親の過剰なまでの思いが見えます。

<厚生省が示す虐待の事例>

- ①身体的虐待
- ②性的虐待
- ③心理的虐待
- ④ネグレクト

この特徴は、生命や身体の安全が脅かされるような暴力や暴行にとどまらずに、子どもの自尊感情を傷つけるような態度や行為、大人としての保護・教育の責任の役割放棄も含めているところです。

家庭での親からの虐待、学校での教師からの体罰、心罰、メディアの情報による虐待、日常の生活のそのものが虐待とつながっている子どもたち。今日の虐待の問題は個々の家庭や親のみならず、広く社会的・構造的な問題との関連の中でとらえなければ、その真相や解決策は見えてこないのです。これは、現在置かれている子どもたちを取り巻く環境をまた、その背景や原因を丁寧に分析することが必要になってくるでしょう。